

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007 ～2009

課題番号：19530809

研究課題名（和文）情報読解力を育成する社会科授業の開発研究

研究課題名（英文）Developing of Social Studies Lessons for promoting the Reading Literacy of Information

研究代表者

關 浩和（SEKI HIROKAZU）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：00432584

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会科において、実際にどのような授業として組織すれば、情報読解力を育成することができるのかを理論的原理的に考察するとともに、具体的实际的に解明をしている。子どもに情報読解力を育成するための授業の原理と構造を解明した上で、社会科授業の開発と分析を通して、情報読解力を育成するための社会科モデル授業として例示している。

研究成果の概要（英文）：A principle of the theory considers whether you can raise the Reading Literacy of Information if I really organize it as any kind of class in social studies in this study, and a fact of the concreteness elucidates it. Through development and the analysis of the social studies class, I exemplify it as social studies model class to bring up the Reading Literacy of Information after having elucidated a principle and the structure of the class to raise information literacy to a learner.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育

キーワード：社会科教育，教材開発，授業開発，情報リテラシー，情報読解力，学習指導法，ウェビング法，構成主義的アプローチ

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本の教育界は、「教科の内容を系統的にしっかりと教える」という考え

と「子どもの興味・関心・体験を重視して、生活に結びついた学習を目指す」という考え方を両極として、振り子のように揺れ動いて

きた。1980年代半ばには、校内暴力、不登校、いじめ問題など学校の病理現象が顕著になり、子どもへの「詰め込み型授業」にその原因を求め、とりわけ教科学習と学校で多くのストレスにさらされた子どもへの対応として、「ゆとり教育」の登場となる。しかし、教育界内外からの学力低下論や、国際教育到達度評価学会や文部科学省・国立教育政策研究所教育課程センターの調査などの結果に基づいて、見直しが迫られ、「確かな学力」の育成が叫ばれている。教育界に限らず、必要なことは、本質を見極める目とバランス感覚である。その時々々の風潮に流され、教科内容が削減されたり、教科そのものが廃止されたり、統合再編されたりしたら、現場の教師や、子どもへの影響は計り知れない。ただ、振り子のように揺れ動きながらも、よりよい方向に向けて進んでいると信じたい。

このような流れの中で、大きな課題として注目されているのが「読解力」である。読解力とは、単に文章を読み取り解釈するだけでなく、学び取った知識や技能を実生活の様々な場面で適用できることを視野に入れている。この読解力と社会科を結びつけるのが情報リテラシーの存在である。

情報リテラシーとは、情報化社会にあつて、個々に対応した教育を推進していくために、コンピュータを始めとする情報関連機器を積極的に活かした教育活動の一層の充実に加えて、あふれた情報を読み解く力(=情報読解力)の育成を視野に入れたものである。情報リテラシーと言えば、すぐにコンピュータを使える能力、つまり、コンピュータ・リテラシーに結びつけられるが、大事なものは、操作方法ではなく「中身」の吟味である。情報を吟味できる力の育成が、今、求められている。ただ、情報リテラシーの育成

は、社会科だけが担うものではない。すべての教科・総合的学習・特別活動・道徳などを含めた教育課程の中で育成されるべきものである。それでは、社会科の役割はどこにあるのだろうか。それは、社会科こそが、社会に大きな流れを生んだり、間違った流れを止めたりすることのできる教科なのである。科学的に実証されたデータに基づいて動向を客観的に分析できる。これが、社会においては大切な役割である。

2. 研究の目的

現代社会は、構成員である市民による決定、それに基づいた公正な運営を必要としている。これは社会における民主主義化であり、民主主義化の中で要請されているのが情報を正しく読み解く力、すなわち、情報読解力の育成である。このような要請に学校教育が応えることが現代社会の課題である。その役割を担う中心になるのが教育課程の中では社会科といえるだろう。本研究の目的は、社会科において、実際にどのような授業として組織すれば、情報読解力を育成することができるのかを理論的・原理的に考察するとともに、具体的・实际的に解明することである。本研究では、子どもに情報読解力を育成するための授業の原理と構造を解明し、情報読解力を育成するための社会科モデル授業として例示する。

3. 研究の方法

- (1)わが国における情報読解力の育成に関わる事例を収集する。
- (2)先行研究事例として、アメリカインディアナ州の教育プログラムの情報収集を行う。
- (3)情報読解力の育成に積極的に取り組んでいる学校を協力校として選定し、各学校での取り組みを概査する。
- (4)収集した実践事例の授業関連リソースの

整理・編集を行い、分析対象の事例を選択する。

(5)収集した実践事例は、構成主義的アプローチの援用によって分類し、それぞれの構成原理を解明する。

(6)分析して解明した構成原理に基づいて、モデルとなる社会科授業を開発する。

(7)開発したモデル授業を実際の現場で実践することで実証的な研究にする。

(8)研究成果を公表する。

研究成果の一部は、学会で積極的に発表を行い、批判を仰ぎ改良を加える。3年間の研究成果を研究報告書により公表をする。

4. 研究成果

本研究では、社会科における読解力を情報読解力と捉え、情報読解力を育成するための社会科授業づくりを通して、社会科授業における「習得・活用・探究」と情報読解力のレベルを次のように位置づけて実践に取り組んだ。

表1 社会科における情報読解力のレベル

情報読解力のレベル	読解の目的	場面
①言語的読解 予備的レベル	具体的事実や情報を読み解く。 コンテンツ contents の把握。構造化された情報。	習得
②文脈的読解 アドバンスレベル	社会的背景や相互の関係性を読み解く。 コンテキスト context の把握。構造化されていない情報。	活用
③適用的読解 エキスパートレベル	現代社会や生活の中に適用して読み解く。 知識の精緻化・一般化の段階。	探究

アメリカのインディアナ州で歴史的建造物の構造を読み解く社会科関連教育プログラムについては、具体的な視点の必要性和協働的な学習活動の取り組みを分析できたことで、日本の社会科教育に関する多様な示唆を示している。

また、情報読解力を育成する社会科授業の新しい形態を社会科教育の体系に組み込むための授業構造を解明し、その具体的な単元例を提示している。その際、社会科授業にお

ける習得・活用・探究を視点にして、学習者の認識内容の質的変容と主体的関与を保障するために、学習者の理論形成のための方法として、情報を一つのトピックとして捉え、関連づけていく Web の手法を援用したウェビング法を援用している。

表2 社会科授業における習得・活用・探究

習得	○基礎的、基本的な知識・技能を習得する。 → コンテンツ contents の把握 ○「概念」を習得する。=本質 転移・応用ができる知識 ○インプット input が重視される。 「習得」にもレベルがある。(記述→分析→説明→概念→価値判断)
活用	○つながりや関わりが求められる。 → コンテキスト context ・理解につなげる。 「理解」「説明」が重視される。 → 「論述」が求められる。 ○アウトプット output が重視される。
探究	○ 通用化の段階 → 社会生活や現代社会で通用する。 for の意識 ○ 通用のレベルとは ・ 具体的な問題に適用して解決ができる。 ・ ものごとの模範を示して説明ができる。 ・ 現実の社会・文化とつなげて考えることができる。 ・ 関連する世界を広げることができる。 ○ 個々に統合化の段階

この情報読解力と社会科授業の習得・活用・探究過程を結びつけた授業を究明し、開発できたことで、今後の社会科教育研究を発展させる基盤を形成することになる。

授業開発を行ったCMを読解する社会科授業やイラストを読解する社会科授業の事例では、自分の生活への適用の意識づけができる構成になっている。テレビ番組におけるCMの役割を焦点化することで、CMの手法やCMのもつアйдカの法則とも関連づけて、CMが最先端のプレゼンであるという認識が生まれている。さらに、自作のCMを発表し相互評価をすることで、情報の受け手、送り手としてどのように情報を活用すればいいのか、また、メディアからの情報をそのまま受け入れるのではなく、批判的な検討を加えたり、他の別な情報と比較したりして、情報の使い手となる構えをもつことの意義を意識できたことは授業開発の成果である。また、イラストを読解する授業では、ビゴアの風刺画を読解する過程を通して、当時の日

本や世界の情勢をイメージ化することにつながった。子どもが、自分と同じ「人間」の行為として理解することからスタートすることで、読解のレベルを向上することができた。さらに、分析対象とした Historic Landmark Foundation of Indiana の社会科関連教育プログラムにおける協働による調査や交流的要素を組み入れて、授業開発研究につなげている。ウェビング法は、授業という枠を越えて、社会で生きていくための知的な武器と成り得る。問題を発見し、その解策やその後の見通し、新しいつながりを構築していくことが目的だからである。全体と部分の構造や関係を明らかにしていくことで、問題の本質に迫っていく。ウェビング法による概念操作によるキーワードの発見と融合による新しい関係の構築によって、自己認識形成を目指していくことが目的とされるべきである。

本研究で、提示した小学校社会科授業開発事例(実証的・実践的研究)は、以下の2事例である。

○第5学年社会科授業開発－CM(映像)を読解する社会科授業「わたしたちの生活と情報」－

○第6学年社会科授業開発－イラストを読解する社会科授業「明治の世の中」－

他にも研究協力者と協力して開発した授業事例は、10事例ある。今回は、紙幅の関係で、2事例に焦点化して報告をしているが、他の機会に積極的に発信していく予定である。

また、本研究で、提示した社会科授業モデルの開発事例は、以下の16事例である。

○中学年社会科授業モデルの開発研究

- ・学習指導案モデル①法やきまりについて考える単元「廃棄物の処理」指導案モデル
- ・学習指導案モデル②関係機関と地域の人々と協力について考える単元「地域の防犯」

指導案モデル

- ・学習指導案モデル③地域の歴史遺産から先人の働きを学ぶ単元「地域調査」指導案モデル
- ・学習指導案モデル④方位や主な地図記号をまとめ定着させる単元「47都道府県」指導案モデル

○第5学年社会科授業モデルの開発研究

- ・学習指導案モデル⑤近隣の主な国の名称・位置と国旗について考える単元「領土」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑥環境保全について考える単元「森林のはたらき」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑦価格や交通について考える単元「季節の果物」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑧地図や地球儀を活用して世界との貿易を考える単元「部品輸出」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑨情報ネットワークを活用して調べ、表現する単元「公共サービス」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑩情報モラルの必要性について考える単元「情報社会に生きる」の指導案モデル

○第6学年社会科授業モデルの開発研究

- ・学習指導案モデル⑪歴史遺産から歴史と文化を学ぶ単元「鎌倉時代」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑫縄文時代のくらしと文化を学ぶ単元「縄文時代」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑬国際大会から国の文化について考える単元「オリンピック」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑭国際社会について考える単元「平和維持活動」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑮国会や裁判所の意味について考える単元「裁判員制度」の指導案モデル
- ・学習指導案モデル⑯参政権から国民の権利

と義務について討論する単元「選挙権」の指導案モデル

これらは、研究の現時点での研究成果である。仮説的なものであり、研究方法もまだ創意工夫する点が多々見いだされるが、引き続き調査と開発研究を行うとともに、教科教育の本質である理論と実践の結合を目指して研究を進めていきたい。今後の課題として、次に示す点があげられる。

- これまで蓄積されている数多くの社会科授業実践事例の検討を通して、授業構成における教材活用と教材構成の抽出と体系化をさらに図っていく必要がある。
- 本研究では、社会科教育及び社会科関連教育プログラムを対象としたが、他教科や特別活動、総合的学習の時間などを含めた教育課程全体に関わる研究と開発に関連づける必要がある。
- 開発した授業モデル案を用いた追試授業を行い、授業結果を批判的に吟味しながら授業モデルを修正していくことが必要である。
- 本研究において、理論的根拠とした社会的構成主義や相互作用のベースとしたシンボリック相互作用論、認知科学などの研究成果の関連づけと構造化について、さらなる理論化を図る必要がある。

本研究が、新たな授業開発への再スタートになるとともに、文化創造としての貴重な授業実践につながられるように、研究活動を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計14件)

- ① 關浩和, 子ども理解や対応力を組み込んで再構築を, 『社会科教育』, 査読無, No.609号, 明治図書, 2010, p.85.
- ② 關浩和, 移行措置の重点指導確認作業のドキュメント小学3・4年=移行措置の重点事項とは, 『社会科教育』, 査読無,

臨時増刊号No.595号, 明治図書, 2008, pp.63-63.

- ③ 關浩和, これからの社会科を考える, 『社会科教室』, 査読無, No50, 日本文教出版, 2008, pp.4-10.
- ④ 關浩和, 体系的な情報モラル教育の推進を, 『授業研究21』, 査読無, No.621号, 明治図書, 2008, pp.24-26.
- ⑤ 關浩和, 「物語」のある授業を創る教材研究の基本, 『学校教育』, 査読無, No.1090, 学校教育研究会, 2008, pp.6-11.
- ⑥ 關浩和, セット教材の開発と対応力の向上を, 『授業研究21』, 査読無, No.618号, 明治図書, 2008, p.15.
- ⑦ 關浩和, 教育実習における社会科学習指導法の指導, 平成19年度文協協会研究助成金研究報告書, 「社会科教育理論を活用した教育実習指導の研究」, 査読無, 2008, pp.16-25, pp.46-55.
- ⑧ 關浩和, 愛国心問題授業研究の課題は何か, 『社会科教育』, 査読無, No.585号, 明治図書, 2008, pp.77-79.
- ⑨ 關浩和, 読解力向上をめざす社会科の授業づくり, 『社会科教室』, 査読無, No47, 日本文教出版, 2007, pp.8-11.
- ⑩ 關浩和, 「熟考」による社会科の読解力向上に向けて, 『兵庫教育』, 査読無, No.679, 兵庫県教育委員会, 2007, pp.14-19.
- ⑪ 關浩和, ウェブニング法で創る社会科授業, 文部科学省教育課程課編集『初等教育資料』, 査読無, No.824号, 東洋館出版, 2007, pp.70-73.
- ⑫ 關浩和, 基礎知識+ α の新情報で論文づくり:キーポイントはここだ“選挙制度”, 『社会科教育』, 査読無, No.579号, 明治図書, 2007, p.70.
- ⑬ 關浩和, つまづきをプラスにするリフレ

クシオンを取り入れる、『授業研究21』,
査読無, No.609号, 明治図書, 2007, p.9。

- ⑭ 關浩和, 主権者形成というビジョンを明確に, 『現代教育科学』, 査読無, No.609号, 明治図書, 2007, pp.68-70。

[学会発表] (計4件)

- ① 關浩和, 情報読解力に関わる社会科授業構成論, 社会系教科教育学会第21回全国研究発表大会, 2010年2月21日, 兵庫教育大学。
- ② 關浩和, 情報読解力を育成する社会科授業づくりーウェビング法を活用した習得・活用・探究のあり方ー, 全国社会科教育学会第58回全国研究大会, 2009年10月11日, 弘前大学。
- ③ 關浩和・千代章一郎, 小学校5年生児童と6年生児童における生活環境のウェビングとアイコン化(共同), こども環境学会2009年大会(千葉), 2009年4月25日, 千葉市Q i b a l l。
- ④ 關浩和・千代章一郎, 小学校5年生児童における生活環境のウェビングとアイコン化(共同), こども環境学会2008年大会(東海)2008年4月26日, 名古屋工業大学。

[図書] (計5件)

- ① 關浩和, 情報読解力形成に関わる社会科授業構成論ー構成主義的アプローチの理論と展開ー, 風間書房, 2009年, 414頁。
- ② 關浩和, 小学校新教育課程 社会科の指導計画作成と授業づくり, 明治図書, 2009年, 160頁。
- ③ 關浩和, 「言語力」をつける社会科授業と評価, 岩田一彦・米田豊編著『「言語力」をつける社会科授業モデル小学校編』明治図書, 2008年, pp.149-164。
- ④ 關浩和, 社会認識, 市民的資質の評価の基本構造, 社会認識教育実践学研究会編

著『社会認識教育実践学の構築』東京書籍, 2008年, pp.415-417。

- ⑤ 關浩和, 情報リテラシーと社会科授業の改善, 明治図書, 2007年, 152頁。

[その他]

ホームページ等

<http://www2.ocn.ne.jp/~hiroseki/sub4.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

關 浩和 (SEKI HIROKAZU)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 00432584

(2) 研究協力者

千代章一郎 (広島大学大学院工学研究科)

岡本 典久 (広島大学附属小学校教諭)

磯部 年晃 (広島大学附属小学校教諭)

升岡 浩 (松山市立雄郡小学校教頭)

末永 琢也 (兵庫教育大学大学院生)

立花 良祐 (兵庫教育大学大学院生)

高橋 佑一郎 (兵庫教育大学大学院生)

前田 潤一 (兵庫教育大学大学院生)

小鷹 狩美菜 (兵庫教育大学大学院生)

茂崎 江里子 (兵庫教育大学大学院生)